



# 町民文芸

## 只見短歌会 令和五年二月詠草

昭和史の書籍本棚にかざり終へ一ページも読めず夫は逝きたり

馬場 八智

風よどに宿るが如く集まれり落葉は赤き色を保ちつ

目黒 富子

寒に入り寒さ冷たさ厳しかり太陽久し雲間に照りて

関谷登美子

「いつてきます」に笑顔を返す<sup>おきなご</sup>幼児に泣いて欲しいとパパは思ふに

立花 奏音

東京に育ちし従姉は時をりに空襲の事長く語りぬ

新国由紀子

吹雪く日は外出控へ暖をとり揺れる窓辺に歌集読みあつ

渡部ヨリ子

ライターを初めて使ひ香点し振りて消しゐるを娘は笑ふ

新国 洋子

(出詠順)

## 只見俳句会 二月定例会

日高俊平太 指導

今日一日楽しく過ごそう吹雪<sup>ふぶく</sup>中

睦子

譲られし優先席や年の暮

修一

冬晴やランラン気分で親子ぞり

紺青

妹の術後の電話冬の虹

信

ともしりけりまわり消えたる雪を搔く

恒夫

今時はスマホ片手の受験生

都

区切りなき男の時間薪を足す

礼

お年玉家族で座る朱い膳

一恵

離農の戸増えたる村のどんどかな

一穂

書の話して時忘る大晦日

真理子

料峭や紙屑黒く舞い上がる

子規の句を今年も書けり筆始

一恵

雛の娘を抱けば聞ゆる雛の声

風花や山の向こうの子等如何に

喜寿の夫パソコン上手し窓は雪